

令和5年度出土遺物公開事業

流山新市街地地区の遺跡展

大地より出でし
先人の足跡



大久保遺跡出土
有撮石器（縄文時代）



大久保遺跡出土
石器接合資料（旧石器時代）

西初石五丁目遺跡出土
台付甕（古墳時代）

遺構写真提供：千葉県教育委員会

【主催】公益財団法人千葉県教育振興財団

開催館

流山市立博物館

令和5年7月15日土～9月3日日 流山市加1-1225-6

八千代市立郷土博物館

令和5年10月14日土～12月3日日 八千代市村上1170-2

木更津市郷土博物館金のすず

令和6年1月20日土～2月25日日 木更津市太田2-16-2

【共催】流山市立博物館、八千代市立郷土博物館 【協力】木更津市郷土博物館金のすず

【後援】千葉県教育委員会、流山市教育委員会、八千代市教育委員会、木更津市教育委員会

【問い合わせ】公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター ☎043-424-4850 <https://www.echiba.org/bunkazai/>



ごあいさつ

千葉県では年間450件ほどの発掘調査が行われ、房総各地の歴史と文化を伝える貴重な成果が数多く得られており、当財団の調査成果については、展示会や遺跡見学会、ホームページ、広報紙『房総の文化財』等で順次ご紹介してまいりました。

今回企画した展示会は、当財団が平成9年度から平成30年度にかけて実施した流山新市街地地区における土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果を「流山新市街地地区の遺跡展－大地より出でし先人の足跡－」と題して、ご紹介いたします。

房総の一角に展開した、旧石器時代から近世の各時代にわたる多様な文化の様相を感じていただき、埋蔵文化財保護へのご理解をお願い申し上げる次第です。

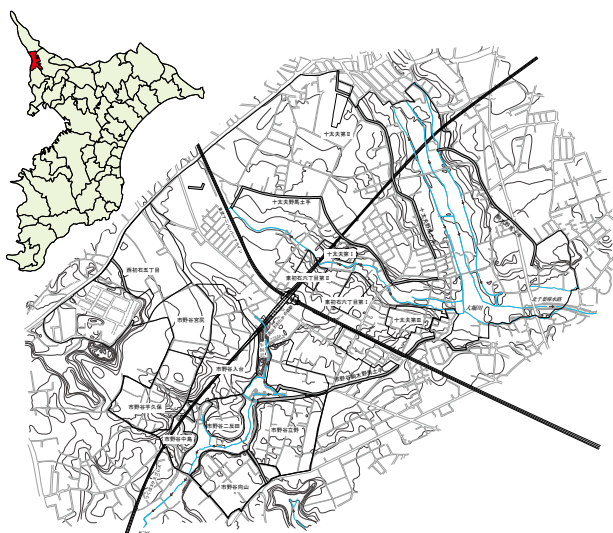
最後になりましたが、ご協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心からお礼申し上げます。

公益財団法人 千葉県教育振興財団

- 凡例
1. 本図録は、令和5年度出土遺物公開事業「流山新市街地地区の遺跡展」の展示解説図録です。
 2. 本展示は、文化財センター長 木原高弘・調査第二課長 當眞嗣史の指導のもと、主任上席文化財主事 上守秀明、文化財主事 片山祐介・伊藤弘一が担当しました。
 3. 図録の執筆・編集は、第Ⅰ部を主任上席文化財主事島立桂、第Ⅱ部を上守、第Ⅲ部を當眞、第Ⅳ部を伊藤、第Ⅴ部を片山が担当しました。
 4. 展示資料一覧には、展示番号、資料名、遺跡名を記載しました。
 5. 開催館によっては、展示資料一覧に記載した資料の一部が展示されていない場合があります。
 6. 本書掲載の図版の提供や出典等については、巻末に記載しました。
 7. 本展示の企画・開催、資料借用ならびに本書の編集にあたり、千葉県教育委員会をはじめ、関係諸機関、関係者の御指導、御協力を賜りました。ここに御芳名を記し、深く感謝の意を表します。
- 団体 流山市教育委員会、流山市立博物館、八千代市教育委員会、八千代市立郷土博物館、木更津市教育委員会、木更津市郷土博物館金のすず、千葉県立房総のむら、松戸市教育委員会、松戸市立博物館、白井市教育委員会、白井市郷土資料館、福井県年縞博物館
- 個人 石井友菜・稲葉昭智・小川勝和・小栗信一郎・北澤滋・高梨俊夫・常松成人・戸谷敦司・富澤達三・萩原恭一・橋本勝雄

流山新市街地地区の概要

流山新市街地地区は、UR都市機構によりつくばエクスプレスと東武アーバンパークライン「流山おおたかの森駅」を中心に約275ヘクタールの規模で計画された土地区画整理事業です。駅名の由来となったオオタカの営業地である「市野谷の森」付近を中心に17遺跡が所在します。当財団では、平成9年度から平成30年度にかけて、約74ヘクタールについて、252回の発掘調査を行い、その成果を11冊の報告書にまとめました。



流山新市街地地区の遺跡は、西側には江戸川の支流坂川の支谷「牛飼沢」を介して、市野谷宮尻遺跡、市野谷入台遺跡、西初石五丁目遺跡、市野谷芋久保遺跡、市野谷向山遺跡、市野谷二反田遺跡、市野谷中島遺跡、市野谷立野遺跡、大久保遺跡が分布しています。東側には、東初石六丁目第Ⅰ遺跡、東初石六丁目第Ⅱ遺跡、十太夫第Ⅰ遺跡、十太夫第Ⅱ遺跡、十太夫第Ⅲ遺跡、十太夫野馬土手、駒木野馬土手、市野谷駒木野馬土手が台地上に分布しています。

第 I 部 旧石器時代 - 最終氷期最寒冷期の石器群 -

1 流山新市街地地区の旧石器時代遺跡

流山新市街地地区では、地区内に所在する17か所の遺跡を発掘調査し、12か所の遺跡から旧石器時代の遺物集中地点（ブロック）171か所、合計23,071点の石器・礫が出土しました（第1表）。

各遺跡から出土したブロックは、後期旧石器時代の初期から終末期に至る各時期に及びますが、出土層位によって区分すると、全体の約6割が立川ローム層V層～IV層下部に集中しており、他の時期に比べ、格段に多いことがわかります。このような傾向は、房総半島だけではなく、南関東でも一般的に見られます。

ところで、旧石器時代とは、どのような時代だったのでしょうか。当時の人々は、季節的に移動を繰り返す「遊動型狩猟採集民」^{ゆうどうがたしゆりようさいしゅうみん}で、環境の変化に応じて狩猟用具や移動範囲（生活圏）を変えていたと考えられます。一方、環境は、最終氷期（今から70,000年前～11,700年前）の後半で、比較的温暖な時期もあれば寒冷な時期もあり、大きく上下動していたようです^(注)。そして、遺跡数やブロック数の最も多い立川ローム層V層～IV層下部の時期（今から28,000年前～24,000年前）は、特に寒冷化した時期に相当し、現在と比べると、年間平均気温が6℃～7℃下がり、海水面も120m以上低下したとされています。

今回は、その最寒冷期に焦点を当てて、出土資料を展示しました。

出土層位		市野谷 芋久保	市野谷 入台	市野谷 立野	市野谷 中島	市野谷 二反田	市野谷 宮尻	市野谷 向山	大久保	十太夫Ⅱ	西初石 五丁目	東初石 六丁目Ⅰ	東初石 六丁目Ⅱ	合計
Ⅲ上面	ブロック数		1											1
	点数		52											52
	単独資料		0											0
Ⅲ中～Ⅲ上	ブロック数	1												1
	点数	91												91
	単独資料	1												1
Ⅲ下～Ⅲ中	ブロック数	3		1					1					5
	点数	48		42					145					235
	単独資料	5		0					0					5
V～IV下	ブロック数	18	17	4	1	1		12	41		4	3	5	106
	点数	905	1,180	616	18	171		484	10,040		107	12	1,045	14,578
	単独資料	16	5	0	0	0		17	840		0	1	0	879
Ⅵ	ブロック数	5	4			2				1				12
	点数	115	510			13				63				701
	単独資料	4	0			0				0				4
Ⅶ	ブロック数		4					6						10
	点数		100					723						823
	単独資料		1					14						15
Ⅸa～Ⅶ下	ブロック数					9		4						13
	点数					3,480		158						3,638
	単独資料					0		0						0
Ⅸc～Ⅸa	ブロック数										2			2
	点数										156			156
	単独資料										0			0
Ⅹ上～Ⅹc	ブロック数	19							2					21
	点数	1,676							110					1,786
	単独資料	8							1					9
単独出土	単独資料	10	48	20	1		1	5		1	12		98	
合計	ブロック数	46	26	5	1	12	0	22	44	1	6	3	5	171
	点数	2,835	1,842	658	18	3,664	0	1,365	10,295	63	263	12	1,045	22,060
	単独資料	44	54	20	1	0	1	36	841	1	12	1	0	1,011

表1 流山新市街地地区の旧石器時代一覧

(注) 氷期の気候変動は、グリーンランド氷床コアや福井県水月湖の湖底堆積物などの分析によりわかってきました。

2 最寒冷期直前の石器群

【いちのやむこうやま市野谷向山遺跡第2文化層・いちのやいりだい市野谷入台遺跡第2文化層・いちのやいもくほ市野谷芋久保遺跡第2文化層】

今から32,000年ほど前、急激な寒冷化が起こり、それに対応するかのようになり、房総半島の旧石器時代石器群は大きく変化しました。出土層位は、たちかわ立川ローム層Ⅶ層上部～Ⅵ層です。

前半期（Ⅶ層上部）の石器群は、大型の石刃と、それを素材とするナイフ形石器、搔器など、限られた種類で構成されています。大型の石刃は、ナイフ形石器などの素材としてだけでなく、それ自体が石器として利用され、①刃部が損傷すると鋭利な刃部へと更新し、②大きく欠損すると、小型の石刃を生産する石核に転用されました。また、石器の石材は、群馬県の黒色安山岩、黒色頁岩、磐越高地以北に産出する東北産頁岩が多用されますが、房総半島の遺跡で大型の石刃を生産した形跡が見られないことから、石材原産地において生産され、完成品ないしは未成品の状態を持ち込まれたと想定されます。

石器の原材料は、季節的に移動する生活の中で、自ら調達したと想定されるので、遠隔地の石材が多用されるということは、急速な寒冷化など、環境の悪化に伴って、当時の人々が、年間の食料調達範囲＝移動範囲を、それまでよりも広域に拡大することで対応したと考えられます。また、長距離の移動にあたっては、携帯する石器を軽量化し、繰り返し再利用していました。

後半期（Ⅵ層）の石器群は、中型の石刃と、それを素材とするナイフ形石器、厚手の剥片を用いた搔器などに限定されています。前半期と異なり、石器の石材は、霧ヶ峰～和田峠周辺に産する黒曜石が多用され、また、原石、石核を房総半島に持ち込んで、石刃の生産を行っています。石核は徹底的に使い尽くされています。



図1 最寒冷期直前(立川ローム層Ⅶ層上部～Ⅵ層出土)の石器群

最終氷期最寒冷期直前の石器群は、搔器を安定して保有し、石刃技法が卓越しています。これは、北海道、東北地方に分布の中心をもつ「寒冷地適応」の石器、技術と考えられます。また、東北産頁岩による大型の石刃石器群、信州産黒曜石による中型の石刃石器群とともに、出土石器の数量が少なく石器石材の種類が限られることから、滞在期間が短かく、石材産地から短時間で房総半島に移動したことが考えられます。

3 最寒冷期の石器群

【大久保遺跡第2a・2b文化層・市野谷向山遺跡第3文化層・十太夫第Ⅱ遺跡・市野谷入台遺跡第3文化層・市野谷芋久保遺跡第3文化層】

出土層位は、立川ローム層Ⅴ層～Ⅳ層下部（今から28,000年前～24,000年前）で、石器群は、ナイフ形石器3種（縦長剥片の基部と先端を加工したもの、横長剥片の側縁を加工したもの、各種剥片による切出形）と角錐状石器、搔器を中心に、各種削器があり、後半期には槍先形石器が出現するなど、旧石器時代の中でも剥片石器の種類が最も多くなりました。一方、石器の素材は、不整形な剥片が主流で、前段階に盛行した石刃技法は少なく、石器の石材は、安山岩、頁岩、凝灰岩、チャート、ホルンフェルス、玉髓など、県内上総丘陵の砂礫層を含めて、関東平野及び関東山地に産出される「近接地石材」が主体とな



図2 最寒冷期(立川ローム層Ⅳ層下部・Ⅴ層出土)の石器群

ります。その他、焼けた礫が高頻度で伴うという特徴があります。

当該期は、立川ローム層Ⅷ層上部～Ⅵ層と同様、寒冷環境下ではあるものの、東北産頁岩などの「遠隔地石材」を利用せず、近接地石材によって石器が製作されています。これは、年間の食料調達範囲＝移動範囲が縮小したことを意味します。継続的な寒冷環境下において、人々は対処方法を変えた可能性があります。まず一つは、石器の種類を増やし、装備を充実すること。次に、礫群の利用です。礫群は、拳大の円礫を焼いて利用・廃棄されたもので、大小の破片となって出土します。当該期の礫群は、石器のブロックと同様、直径4～5mほどの範囲にまとまり、比較的よく接合します。ただし、接合しても元の円礫に戻らないものが多いことから、使われたまま放置されたのではなく、まとめて投棄されたようです。なお、礫を焼いた場所は特定できません。

礫群は、前半期の立川ローム層Ⅵ層までは少なく、Ⅴ層～Ⅳ層下部の時期に、激増します。動物性食糧の調理に関連すると考えられますが、使用方法はわかっていません。ただ、最寒冷期に激増することに意味があると思います。

4 最寒冷期直後の石器群

【市野谷立野遺跡・市野谷芋久保遺跡第4・5文化層】

最寒冷期直後の石器群は、中型の石刃を用いたナイフ形石器を主体とし、これに、両面調整の槍先形石器や上ゲ屋型彫器あげやがたうきが伴います。

石器の石材は、大半が頁岩、チャート、ホルンフェルス、玉髓など近接地の石材で構成され、遺跡内で石刃生産を行っています。剥片石器の多くは、遺跡内でも製作されますが、槍先形石器については、高原山産、信州産の黒曜石が多用され、完成品や未成品が他所（石材原産地）から持ち込まれています。移動範囲に槍先形石器の製作地＝黒曜石の産地が組み込まれ、仕上げや作り直しが消費地で行われたと考えられます。



図3 最寒冷期直後(立川ローム層Ⅳ層～Ⅲ層出土)の石器群

第Ⅱ部 縄文時代

流山市は北を野田市、南を松戸市、東を柏市に接しており、市域は南北に細長い形をしています。縄文遺跡が所在する台地の西半は奥東京湾側（現在の江戸川低地側）から、東半は古鬼怒湾側（現在の利根川低地）から枝分かれして入り込んだ谷にそれぞれ面していますが、遺跡数と調査事例は奥東京湾側が多いです。流山新市街地地区では西初石五丁目や市野谷に所在する9遺跡が奥東京湾側に位置し、東初石六丁目、十太夫に所在する5遺跡が古鬼怒湾側に位置しています。

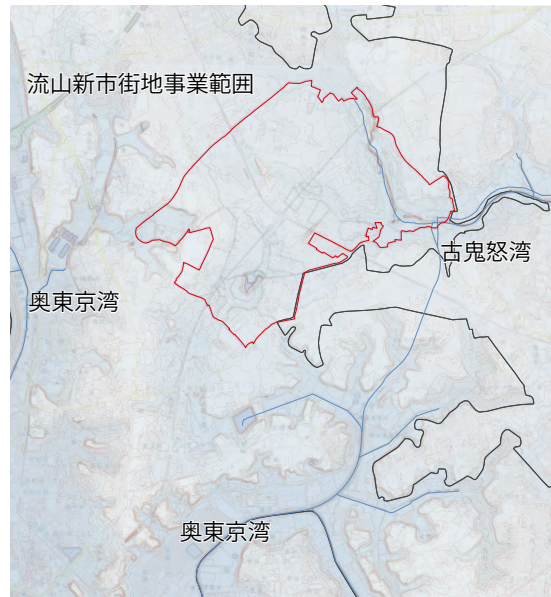


図1 流山新市街地地区の位置と地形

1 出土土器から見た流山新市街地地区の縄文時代

流山新市街地地区の縄文土器の出土量はさほど多量とは言えませんが、早期初頭から晩期中葉まで断続的に出土しています。このうち前期中葉の黒浜式、中期後葉～末葉の加曾利E式、後期初頭の称名寺式、後期前葉の堀之内式、晩期前葉の安行式の時期で住まいの跡が見つかっており、遺構外を含め、晩期を除いたこれらの時期の土器が多く出土しています。

2 ムラのうつりかわり

(1) 前期中葉のムラ

前期中葉黒浜式期の住居跡は全体で37軒見つかっていますが、これらはすべて奥東京湾側にあります（図3-●）。奥東京湾湾央部の今上低地に面した西初石五丁目遺跡、市野谷宮尻遺跡、市野谷芋久保遺跡には分散的で小規模なムラがつけられ、奥東京湾湾口部の矢切低地に面した市野谷向山遺跡と市野谷立野遺跡には、中規模なムラがつけられています。

草創期	(隆線文系) (爪形文系) (多縄文系)	井草Ⅰ 大丸・井草Ⅱ 夏島 稲荷台 稲荷原・花輪台 平板
早期	燃糸文系	
	沈線文系 条痕文系	三戸 田戸下層 田戸上層
前期	羽状縄文系	子母口 野島 鵜力島台 茅山下層 茅山上層 打越 神ノ木台 下吉井
	諸磯a・浮島Ⅰa 諸磯b古・浮島Ⅰb 諸磯b中・浮島Ⅱ 諸磯b新・浮島Ⅲ 諸磯c・興津Ⅰ 十三菩提・興津Ⅱ	花積下層 二ツ木 関山Ⅰ 関山Ⅱ 黒浜
中期	五領ケ台Ⅰ 五領ケ台Ⅱ・阿玉台Ⅰa 勝坂Ⅰ・阿玉台Ⅰb 勝坂Ⅱ・阿玉台Ⅱ(古) 勝坂Ⅲ・阿玉台Ⅱ(新) 勝坂Ⅳ・阿玉台Ⅲ 勝坂Ⅴ 阿玉台Ⅳ	
	加曾利EⅠ 加曾利EⅡ 加曾利EⅢ 加曾利EⅣ	
後期	称名寺Ⅰ 称名寺Ⅱ 堀之内Ⅰ 堀之内Ⅱ 加曾利B1 加曾利B2 加曾利B3	
	曾谷 安行1 安行2	
晩期	安行3a 安行3b・姥山 安行3c・前浦Ⅰ 安行3d・前浦Ⅱ 千網 荒海	

図2 千葉県を中心とした縄文土器編年

流山市域の今までの調査成果によれば、黒浜式期の住居跡は広く市内から見つかっています。特に流山新市街地地区の西に隣接する三輪野山遺跡群では50軒以上見つかっており、市内最大のムラになります。

黒浜式は、前期前半の多種多様な縄文を施す羽状縄文土器群の終わりにあたり、前期後半に多用される竹管文を施したのも含まれます(図4)。

(2) 中期後葉～末葉のムラ

中期中葉勝坂式終末～後葉加曾利EⅡ式期には地域の拠点となる環状集落が形成されます。流山市域では中野久木谷頭遺跡が好例です。環状集落終焉後となる末葉加曾利EⅢ・EⅣ式期は分散的な居住形態を示すようになり、ムラもそれ以前のような長期的・集中的な居住形態を示しません。

流山新市街地地区の中期後葉～末葉加曾利E式期の住居跡は全体で6軒(図5-●)と少なく、市野谷宮尻遺跡と十太夫第Ⅲ遺跡では各1軒の検出です。しかし、市野谷向山遺跡では加曾利EⅢ式・Ⅳ式の住居跡が4軒、近接して見つかっており、遺跡は隣接する運動公園地区まで広がります。この範囲でも該期の住居跡が多く検出されていることから、流山市域においては規模の大きなムラと言えるでしょう。

ここでは底部を欠いた加曾利EⅣ式土器を斜位に埋設した炉が見つかります(図6)。この斜位土器埋設炉は、東北南部大木9・10式の複式炉との関係性が考えられるもので、県内では印旛郡・香取郡を主に類例が見られますが、近隣では市川市高谷津遺跡例があります。これらの埋設土器は加曾利EⅢ式で



図3 前期中葉の住居跡の分布



図4 黒浜式土器(左:西初石五丁目遺跡、右:市野谷芋久保遺跡)



図5 中期後葉～晩期前葉の住居跡の分布

すので、市野谷向山遺跡例はより新しい事例と言えます。

(3) 後期初頭～前葉のムラ

後期初頭称名寺式期の住居跡は8軒で、内訳は奥東京湾湾口部の矢切低地から入り込む谷に面した市野谷二反田遺



図6 加曾利EⅣ式土器・斜位土器埋設炉(市野谷向山遺跡)

跡で7軒、大久保遺跡で1軒と、この2遺跡の範囲に限られています(図5-●)。流山市域では西深井一のわり第Ⅰ遺跡、江戸川台第Ⅰ遺跡、大畔中ノ割遺跡など、奥東京湾側に称名寺式期のムラが複数認められますが、新市街地地区大久保遺跡例(図7)を含め、称名寺Ⅰ式後半からⅡ式のものが多い傾向にあります。

後期前葉堀之内式期の住居跡は3軒(図5-●)で、内訳は市野谷入台遺跡1軒、市野谷立野遺跡2軒と分散的かつ零細です。この2遺跡は後期初頭と同様に、奥東京湾湾口部の矢切低地から入り込む谷に面した位置にあり、出土土器は堀之内1式のもので(図8)。流山市域では堀之内1式期になると住居跡が大きく増加し、三輪野山貝塚を中心とした三輪野山遺跡群、江戸川台西端の中野久木貝塚・日暮遺跡などでは大きなムラが形成されますが、流山新市街地地区の後期初頭～前葉のムラは、矢切低地から入り込んだ谷の最奥部を共有した台地上に小規模で分散的に営まれたと言えそうです。



図7 称名寺Ⅰ式土器(大久保遺跡)

(4) 晩期前葉のムラ

晩期前葉安行式期の住居跡は市野谷立野遺跡の1軒で、後期初頭～前葉のムラと同様に、矢切低地から入り込んだ谷の最奥部に面した台地上に位置しています(図5-●)。出土した土器は安行3c式と関東東部地域に分布する姥山Ⅲ式です(図9)。後期前葉から晩期前葉までは、一定地域の中で長期継続する大きなムラがある一方で、短期・分散的なムラが認められます。該期の新市街地地区は後者と言えるでしょう。流山市域では三輪野山貝塚、野々下貝塚に長期継続型の大きなムラが営まれています。



図8 堀之内1式土器(市野谷立野遺跡)



図9 姥山Ⅲ式土器(市野谷立野遺跡)

3 石器・石製品のいろいろ

石器は剥片を素材とした剥片石器と、礫を素材とした礫石器があります。これらは生産用具、生活用具として製作された道具です。剥片石器では先ず狩猟用の石器があげられます。有舌尖頭器は縄文時代草創期に槍先に装着した石器で、石鏃は矢の先に装着した石器です。石鏃の石材は主としてチャートや黒曜石が用いられます（図10）。他に孔開けに用いた石錐、稀少な有撮石器が各1点出土しています。

礫石器では先ず土掘具である打製石斧があげられます。分銅形が多く、撥形と短冊形は少ないです（図11）。堅果類加工用の石皿・磨石類は、一つの石器に磨りや叩きの痕が複合して認められます。磨製石斧は木材加工に用いられた石器です。

また、網の錘として用いられたと考えられる石錘が1点出土しています。

石製品では軽石を素材とし持ち手の付いた製品が1点出土しています。用途ははっきりしませんが、下面に擦り面が認められます。また、装身具である珞状耳飾が1点出土しています。いずれも類例から前期中葉を中心に製作されたと考えられます。



図10 石鏃



図11 打製石斧

コラム 大久保遺跡出土の有撮石器

大久保遺跡から関東地方としては出土例が数少ない、精緻な作りの有撮石器が出土しています。有撮石器は撮み付きの両刃石匙と考えられるもので、縄文時代前期後葉の山形県東置賜郡高畠町押出遺跡で多量に出土しています。当初は石器の尖頭部を上、撮み部を下と考えて「押出型ポイント」と命名されていましたが、現在は挟りにより撮みを作り出した器種は押出型石匙=有撮石器とする向きです。

石材は地元の東北産硬質頁岩を用い、表裏とも丁寧な剝離が施されて仕上がっています。他の事例によれば刃部が当初幅広な木葉形であったものが、使い減りする過程で繰り返し再加工した結果、細身になり、ついには棒状に変容するものが認められるとのことですが、大久保遺跡例の刃部は幅広であり使い減りしていません。

この硬質頁岩製有撮石器は、原産地であり製作地でもある押出遺跡付近からはるか200kmを超える旅を経て、もたらされたものと考えられます。600km以上離れた分布遠隔地の和歌山県御坊市天田橋南例を除けば、大久保遺跡例は木更津市上ノ山遺跡例とともに有撮石器の分布域南限に当たります。



図12 有撮石器

第Ⅲ部 古墳時代

1 古墳時代前期の集落 (図1・2)

流山新市街地地区では、弥生時代の遺構は検出されていません。市野谷立野遺跡から弥生土器が1点出土しているのみです。しかし、古墳時代初頭の壺は弥生時代からの系譜を有しています。

古墳時代前期の竪穴住居跡は、市野谷宮尻遺跡で90軒、隣接する西初石五丁目遺跡で20軒、市野谷入台遺跡で6軒、総計116軒検出されています。同一台地上に位置することから、同一集落と考えられます。

この時期は、全国的に地域間交流が活発な時期です。流山新市街地地区もその流れの中にあり、北陸や近江、畿内、尾張、伊勢湾、三河、遠江、駿河といった遠隔地からたらされたか、影響

を受けた外来系土器が出土しています。外来系土器の器種は甕・壺・高杯・器台のみならず、装飾器台や手焙形土器など、特殊な遺物まで広範囲に及んでいます。この時期を特徴付ける器種は、高杯と台付甕です。



図1 古墳時代前期の土器

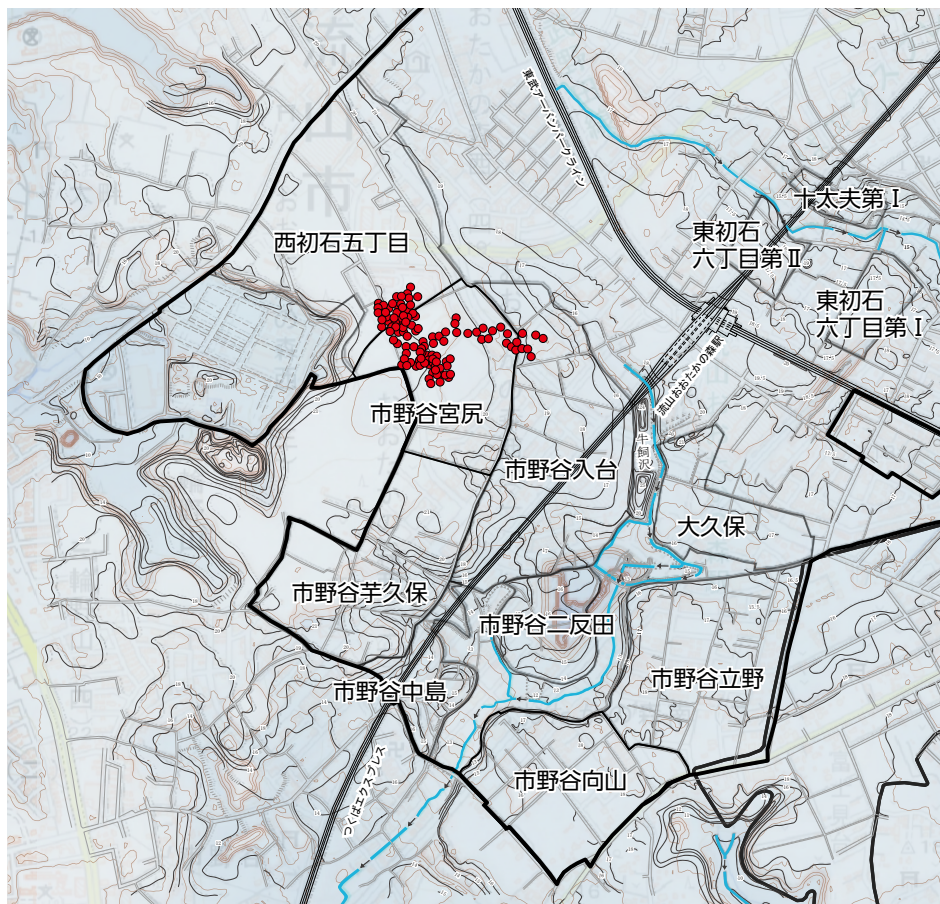


図2 古墳時代前期の竪穴住居跡分布図

2 古墳時代中期の集落 (図3・4)

古墳時代中期の竪穴住居跡は、市野谷入台遺跡で35軒、^{いちの やむこうやま}市野谷向山遺跡で9軒の合計44軒が検出されています。いずれも古墳時代中期前半に収まる時期にあたります。

古墳時代前期は、台地の西側縁辺部に位置する市野谷宮尻遺跡を中心としていますが、中期になると台地の東側に位置する市野谷入台遺跡、谷を挟んだ南側の市野谷向山遺跡に移動しています。

古墳時代中期の中心的な遺跡である市野谷入台遺跡の器種構成を見てみましょう。出土数が多いのは高杯で、次いで甕・小型壺(埴)^{かん}、壺・器台・杯・^{つき}碗・鉢類は少ないです。甕は、前期まで主体であった台付甕が減り、^{ひらぞこがめ}平底甕に置き換わります。

古墳時代中期の土器は、前期まで地域ごとに多様化していた器種の統合が進み、全国的に画一性が強まります。



図3 古墳時代中期の土器

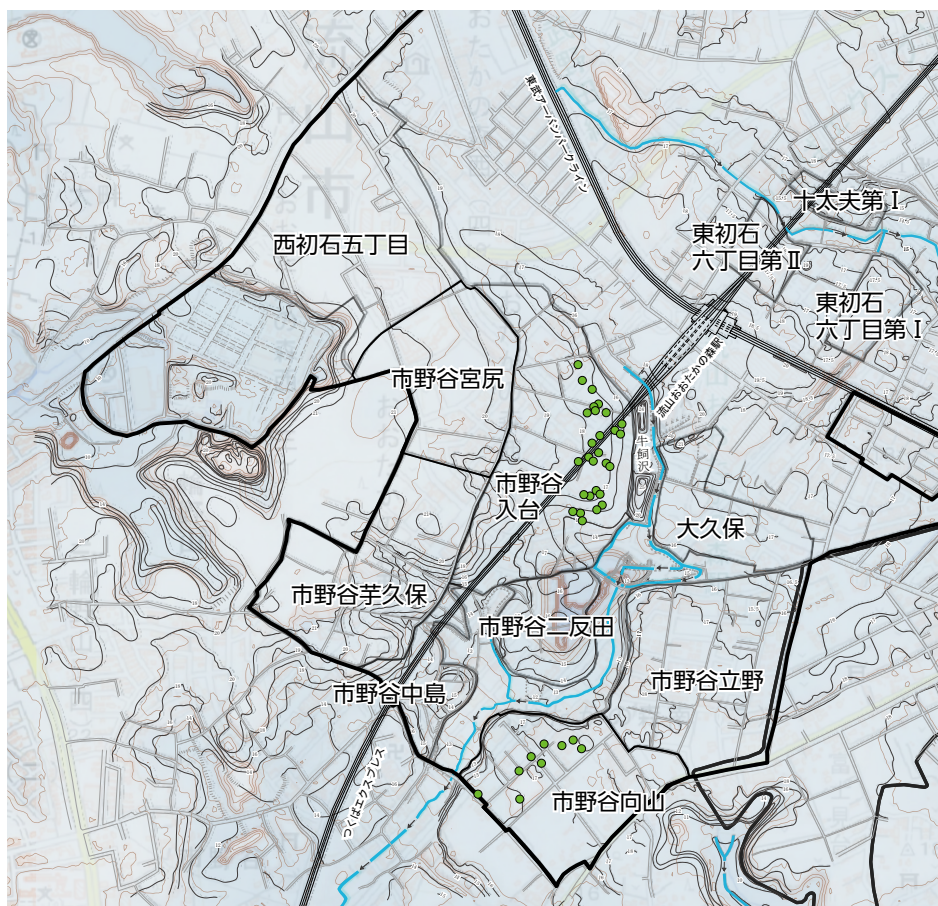


図4 古墳時代中期の竪穴住居跡分布図

3 多様な^{ひどころ}火処から分かること

人が生活していく上で、住居の中の火処（炉）はきわめて重要な施設です。カマド出現前には、様々な形態の火処を見て取れます。

ここでは、大きく火処に関連する事象を①台付甕（図5）、②^{ろきだい}炉器台（図6）、③^{どきへんろいし}土器片炉石（図7）の3つを取上げます。

台付甕：煮沸用の平底甕に、脚台が取り付けられたものです。火床からの炎を甕の胴部下半で効率よく受け止める工夫をしたもので、容量によって大・小に分けられます。台付甕は弥生時代中期に伊勢湾地方で出現し、弥生時代後期以降、東日本で広く利用されました。



図5 台付甕

炉器台：3個一組で、平底の甕を載せて支える「^{ことく}五徳」のような使い方をしたと考えられている器種です。炉器台は、千葉県では東京湾岸、印旛沼周辺・霞ヶ浦周辺地域で多く出土しています。

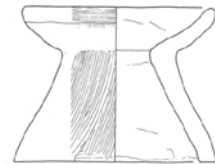


図6 炉器台

土器片炉石：市野谷宮尻遺跡では、炉の焚き口側に土器片が立て掛けられている事例がいくつか散見されます。千葉県では土器片を利用していますが、関東の他地域では石を利用していることが多く、「炉石」と呼んでいます。今回の展示では、土器片を利用していることから「土器片炉石」とします。

この「炉石」の用途については、「^{燃焼材の空気調整}燃焼材の空気調整」であったと想定されています。「炉石」による隙間によって、火力の調節をしていたものと考えられています。

このように流山新市街地地区では、カマド出現前における火処の様々な形態が残されていました。多様な火処の背景には、多様な出自の人で構成される社会であった可能性が指摘できます。

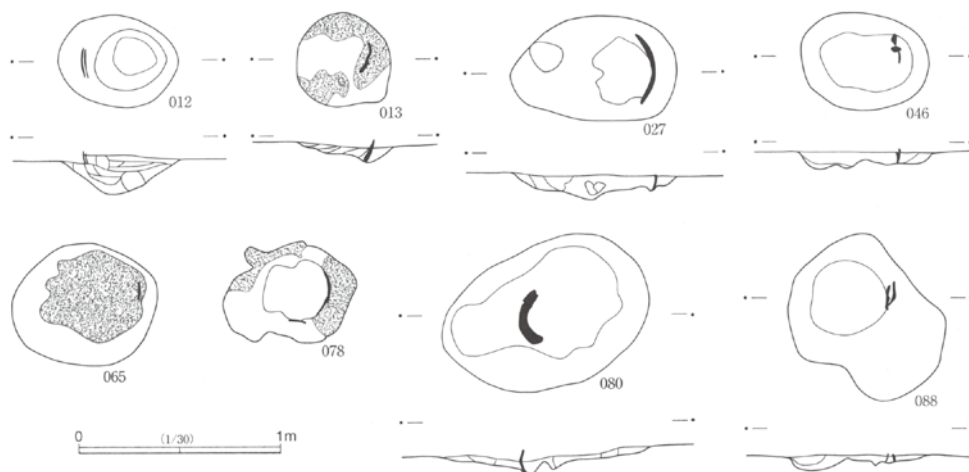


図7 土器片炉石集成図

4 屋外祭祀

市野谷宮尻遺跡からは、手捏土器^{てづね}を多量に使用した祭祀遺構と思われる土器集中地点が見つかっています。残念ながら詳細は不明ですが、調査区北西側の住居がない空地に集積していました。

群馬県渋川市黒井峯遺跡^{しぶかわ くろいみね}は、6世紀に噴火した榛名山の爆発による火山灰・軽石等の噴出物で覆われています。そのため、当時のムラの姿がパックされていました。屋敷地内、道路脇、樹木下などに土器や祭祀遺物が集積された祭祀跡が複数見つかっています。

黒井峯遺跡の例から、市野谷宮尻遺跡出土のものは、道路脇や集落内の空地にある祭祀場で執り行われた屋外祭祀跡と想定されます（図8）。

器種は手捏土器を主体として、壺・甕^{こしき}・甑^{こしき}があります（図9）。古墳時代前期の屋外祭祀はほとんど類例がありません。重要な一例といえるでしょう。



図8 屋外祭祀風景想像図



図9 27N-74グリッド出土遺物

5 屋内祭祀

発見される屋内祭祀の多くは、住居廃絶に伴うものが多くを占めています。市野谷宮尻遺跡では、屋外と同じく手捏土器やミニチュア土器を主体とした祭祀を行っていたことが判明しています。このほかの祭祀関連遺物については、以下のものがあります。

重圈文鏡^{じゅうけんもんきょう}（図10）：西初石五丁目遺跡SI007からは、小型仿製鏡^{しょうせいきやう}の重圈文鏡が出土しています。報告書では「素文鏡^{そもんきやう}」としていますが、内区内^{ないく}の圈線^{けんせん}と段が認められることから重圈文鏡に分類されます。

土玉^{どだま}（図11）：直径3cmほどの、真ん中が貫通している球状の土製品です。炉やその周辺、住居の隅から多く出土します。

土製勾玉^{まがたま}（図12）：土を捏ねて勾玉状に成形し、焼成したものです。



図10 重圈文鏡



図11 土玉



図12 土製勾玉

6 石製模造品工房跡

流山新市街地地区では、石製模造品の工房跡と考えられる竪穴住居跡が見つかっています。石製模造品とは、滑石と呼ばれる比較的柔らかな石材を用いて、様々な器具を模した祭祀具のことです。

市野谷入台遺跡では、18軒の竪穴住居跡から剣形品・有孔円板が見つかり、このうち原石や未成品、剥片などが出土した4軒が工房跡と考えられます(図13)。下総西部地域の工房跡の中では、古い時期にあたる点で重要な遺跡です。

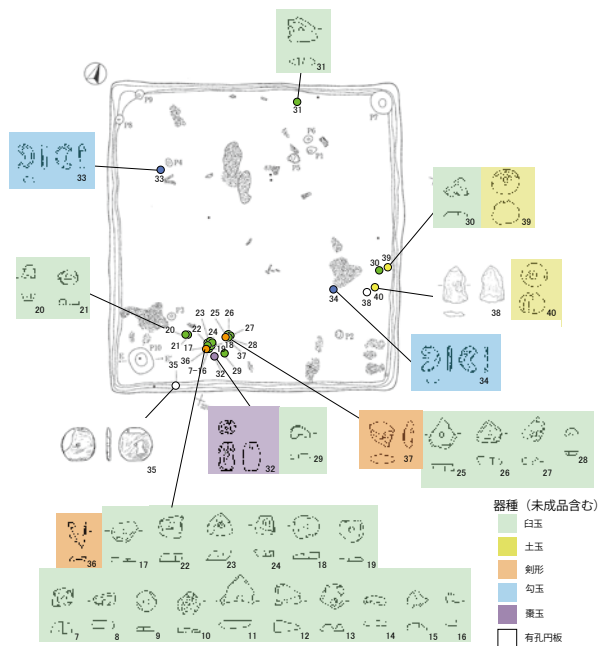


図13 市野谷入台遺跡SI021 工房跡遺物出土状況図

石製模造品は、古墳や祭祀遺構、竪穴住居跡から出土します。住居跡から見つかるものは、小規模なムラ単位で日常の儀礼に関わる祈りに用いられていたと考えられています。

古墳時代中期前半までは、斧・刀子・鑿・鎌などの鉄製農具形、中期中頃から勾玉・鏡(有孔円板)・白玉や、剣などの武器形、機織具形・酒造具形などが加わります。古いものは比較的大型で精巧に作られ、少量が生産されますが、時期が下ると小型で作りが粗雑となり、大量生産されます。

7 製作工程復元(図14)

工房跡と思われる市野谷入台遺跡SI021から出土した石製模造品及び未成品・剥片から製作工程の一部を復元してみましょう。

①石材と母岩：滑石が大部分で、わずかにメノウや凝灰岩、蛇紋岩が見られます。メノウは製品のみです。

②荒割：母岩から、扁平な素材を作り出します。母岩の向きを替えながら、節理(石の目)に沿って薄く剥がして素材に加工します、素材

に見られる割れ口の形状から、金属製工具を使用していたことが想定されています。

③形割～穿孔：扁平素材から、おおまかな形状を作成します。研磨を施す前の段階です。白玉の未成品は三角形や四角形など形が不揃いで、まだ丸く整っていません。棒錘により穿孔されます。

④仕上げ研磨：軽石や凝灰岩製筋砥石による、仕上げ研磨が施されて完成です。

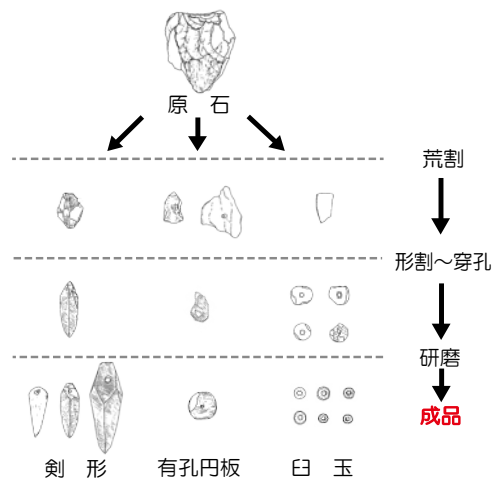


図14 石製模造品製作工程図

東日本最古の墨書土器

流山新市街地地区の市野谷宮尻遺跡からは、墨書土器が出土しています。古墳時代前期の墨書土器は、全国的に見てもきわめて少なく貴重なものです。

この墨書土器は、口径約9cmの「無頸壺」という在地産の土師器です。口縁部外面に筆で縦約2.0cm、横約2.5cmの大きさで、「久」と読める文字が書かれています。この土器は摩耗していないことから、日用品ではなかったと想定されています。土器の胎土から在地産と考えられますが、北陸系装飾器台や元屋敷形高杯といった、他地域の影響を受けた土器に伴って出土しています。

古墳時代前期の墨書土器は、伊勢湾周辺に集中しています（図16）。市野谷宮尻遺跡からは東海・北陸・畿内・駿河の影響を受けた土器が出土しており、この地に移住してきた集団の中に文字を理解する人物が存在していたのかもしれない。



図15 墨書土器「久」

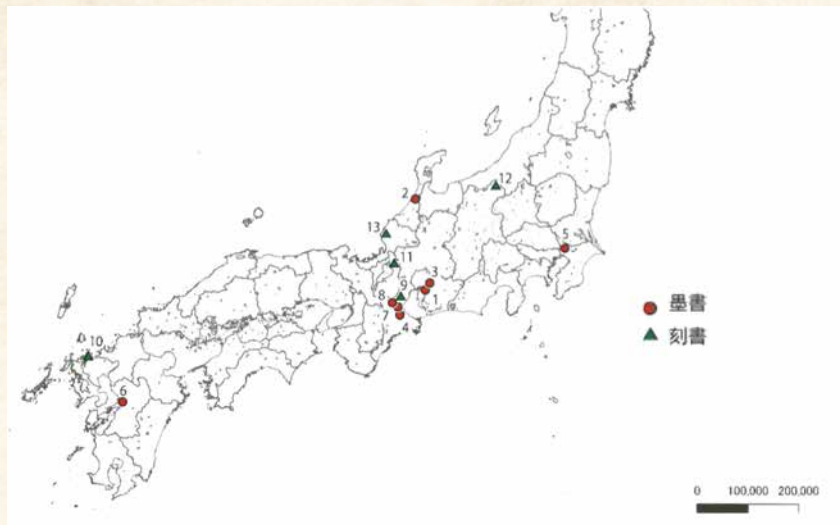


図16 弥生・古墳時代墨書(刻書)土器分布図

遺跡番号	遺跡名	所在地	出土遺構	器種	種別	点数	文字等の内容	時期
1	鹿乗川流域遺跡群	愛知県安城市	自然流路	壺	墨書	2	不明	2世紀中葉
2	千田遺跡	石川県金沢市	大溝・包含層	壺	墨書	1	不明	2世紀中葉
3	川原遺跡	愛知県豊田市	包含層	高杯	墨書	1	不明	2世紀頃
4	貝蔵遺跡	三重県一志郡嬉野町	水路堰跡	壺・高杯	墨書	5	「田」他人面・記号	2世紀末～3世紀前半
5	市野谷宮尻遺跡	千葉県流山市	竪穴住居跡	無頸壺	墨書	1	「久」または「文」・「父」	3世紀後半
6	柳町遺跡	熊本県玉名市	井戸跡	木製鑑留め具	墨書	1	「田」他不明4文字	4世紀初頭
7	片部遺跡	三重県一志郡嬉野町	水路跡	壺	墨書	1	「田」または「虫」	4世紀前半
8	城之越遺跡	三重県上野市比土	大溝Ⅲ層	高杯	墨書	1	記号?	4世紀前半
9	大城遺跡	三重県安芸郡安濃町	竪穴住居跡	高杯	線刻	1	「奉」	2世紀中葉
10	三雲遺跡	福岡県前原氏	溝	甕	線刻	1	「竟(鏡)」	3世紀中葉
11	大戌亥の遺跡	滋賀県長浜市	祭祀遺構	甕	線刻	1	「卜」	3世紀中葉
12	根塚遺跡	長野県下高井郡木島平村	古墳墳丘	壺	線刻	1	「大」	3世紀前半
13	河合寄安遺跡	福井県福井市		高杯	墨書	1	シカの記号	5世紀

表1 弥生・古墳時代墨書(刻書)土器出土一覧表

第Ⅳ部 奈良・平安時代

1 奈良・平安時代の遺跡

流山新市街地地区で見つかった奈良・平安時代の竪穴住居跡は、12軒です。奥まった谷津に面する台地上に竪穴住居跡が単独、あるいは数軒ずつ点在していることが分かりました(図1)。竪穴住居跡はいずれも小さく、出土した土器の量や種類も少なく短期間の生活であったようです。その一方、南西に1kmほど離れた江戸川に面する台地上では百数十軒以上の住居跡が見つかっており、奈良・平安時代を通じて集落が続いていたことが確認されています(図2)。

市野谷宮尻遺跡では、火葬した後の遺骨を納める須恵器の短頸壺が出土しました。これらのことから、江戸川に面する台地上が集落の中心であり、流山新市街地地区は一時的な生活空間あるいは墓域として利用されていたことが考えられます。

2 火葬墓について

火葬墓とは、火葬された遺骨を骨蔵器に納めて土坑に埋納した墓のことです。火葬の風習は、奈良時代に仏教の影響を受けて急速に広まりました。火葬墓同士は重ならず、骨蔵器を納めた埋葬施設の上に土を盛っていたことが文献資料や発掘調査事例から判明しています。骨蔵器は地域や年代、葬られる人物の身分等に応じて、材質や形態など様々なものが作られました(図3)。千葉県火葬墓は、全国的に見ても数も多く内容は豊かであり、火葬をいち早く取り入れた地域であったことがわかります。

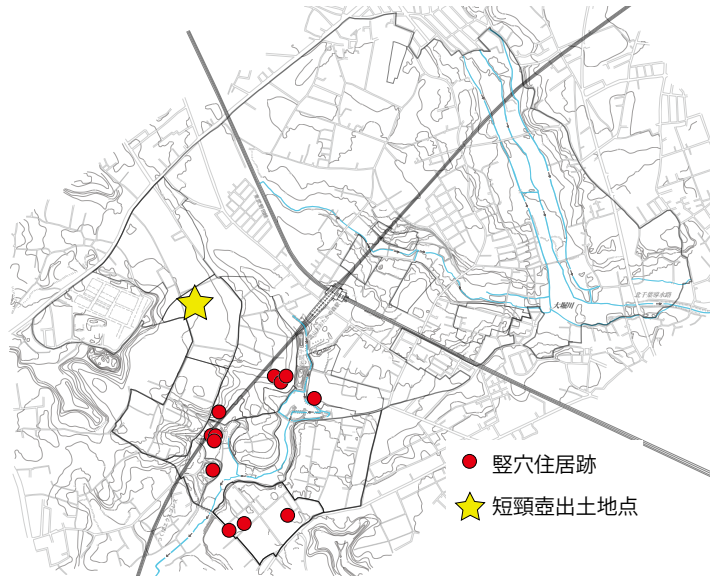


図1 奈良・平安時代 住居跡・短頸壺出土地点

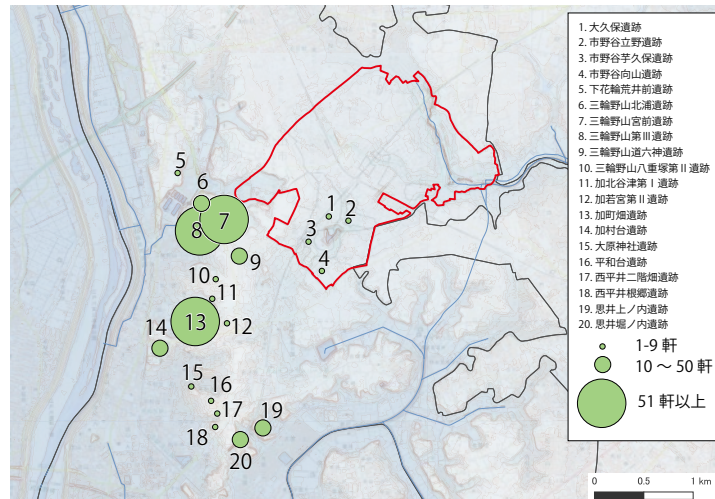


図2 流山新市街地地区 周辺集落分布図

3 出土遺物

須恵器短頸壺 (市野谷宮尻遺跡 図6)

須恵器短頸壺は出土位置が明確ではなく、遺跡範囲の北西付近から出土しました。口縁部から肩部にかけて自然釉がかかっている、奈良時代の終わりごろのものと考えられます。骨蔵器の出土状況がわかる調査事例として、龍角寺ニュータウン遺跡群の火葬墓を紹介します。この骨蔵器は、蓋のある灰釉陶器でした(図4・5)。円形の土壇内に黒色土を敷き、骨蔵器を中央に置いたあと、骨蔵器を木炭で覆い、その上からロームの土を上にかぶせていました。市野谷宮尻遺跡の短頸壺も同じように埋められていたと考えられます。千葉県において古代の火葬墓は、東京湾岸から印旛沼周辺をとおり利根川にぬけるよう帯状に分布しています(図7)。このころは各地で拠点集落が開発され、仏教の影響を受けて集落の周辺に火葬墓が営まれました。拠点集落の開発と火葬墓の造営は、その地域でさかんに人々が往来・生活していたことを示しています。

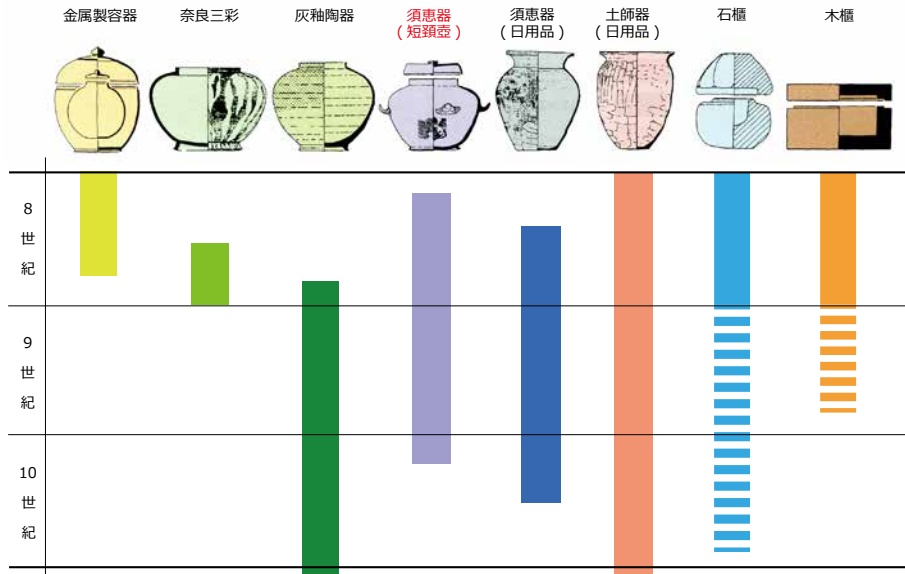


図3 骨蔵器変遷図(『千葉県の歴史 資料編 考古4』より)

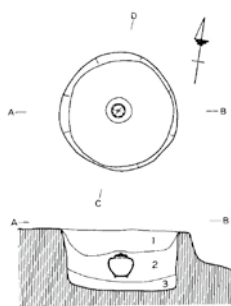


図4 龍角寺ニュータウンNo.4 地点第65号土壇出土骨蔵器



図5 龍角寺ニュータウン 骨蔵器出土状況



図6 市野谷宮尻出土短頸壺

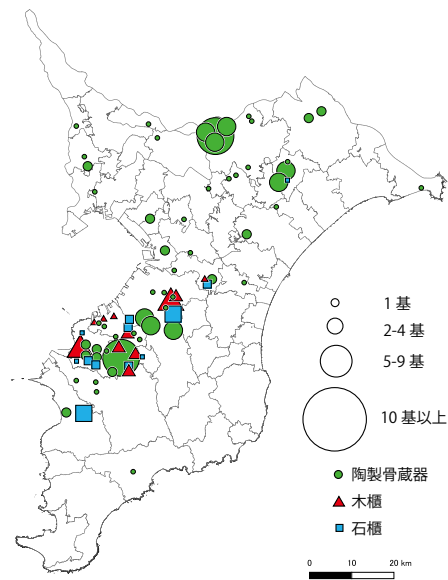


図7 千葉県内出土骨蔵器分布図

第V部 中・近世

1 中近世の遺跡

流山新市街地地区からは、中世の遺構・遺物はほとんど見つかりません。江戸時代の駒木野馬土手、十太夫野馬土手、市野谷駒木野馬土手が残されており、いずれも調査されています。

2 野馬土手・野馬堀

野馬土手・野馬堀は、放牧された馬が逃げ出さないようにするための施設です。千葉県には幕府直営の牧が3か所設けられ、流山・柏地域には、小金牧のこがねまき高田台牧と上野牧が経営されていました（図1）。

流山新市街地地区でも、複数の野馬土手・野馬堀が見つかりました（図2）。発掘調査から、土手は牧側の裾に堀を伴い、部分的に土手の村側にも堀を巡らす構造であったことがわかっています。堀のさらに外側には、野犬除けの落とし穴列（シシ穴）が掘られることもありました。今回の展示遺物は、いずれも野馬堀から出土したものです。

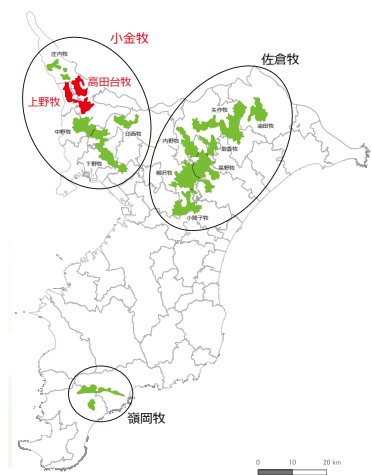


図1 流山新市街地地区 野馬土手

図2 十太夫野馬土手 調査トレンチ

3 出土遺物

銭貨 (西初石五丁目遺跡 図3)

寛永通寶 (古寛永、初鑄1636年) と北宋銭の紹聖元宝 (模鑄銭? 初鑄1094年) が野馬堀から出土しています。堀の堆積土には富士山の宝永噴火 (1707年) 時の火山灰が含まれており、野馬堀築造年代を示していると考えられます。

陶磁器・土器 (市野谷向山遺跡 図4・5)

野馬土手・堀からの出土遺物は非常に少ないですが、市野谷向山遺跡の野馬堀からは、陶磁器がまとまって出土しました。千葉県内の牧は江戸に近いこともあって、放牧馬を追い込んで捕まえる野馬追の際には、見物客が土手の上で見物しながら飲食することもあり (図6)、こうした行事に関連する遺物かもしれません。内容は、肥前系磁器碗 (梅樹文・こんにゃく判・筒形碗)、瀬戸美濃系陶器 (灯明皿、香炉、皿)、瓦質焙烙、かわらけなどです。このほかに内外面に厚く煤がこびりついた灯明皿もあります。時期は18世紀頃とみられます。大久保遺跡からも、18世紀の肥前系磁器皿が出土しています。



図3 銭貨(左：寛永通寶・右：紹聖元宝)



図4 磁器碗一括



図5 灯明皿



図6 印西牧場之真景図 (白井市郷土資料館蔵)
下段は円内拡大、土手上に見物客、出店もある)

図の出典・提供一覧

第Ⅰ部 旧石器時代

表1 財団作成

図1～3 財団撮影

第Ⅱ部 縄文時代

図1～3 財団作成

図4 財団撮影

図5 財団作成

図6 (左) 財団撮影・(右) 千葉県教育委員会提供

図7～12 財団撮影

第Ⅲ部 古墳時代

図1 財団撮影 市野谷宮尻遺跡 (千葉県教育委員会所蔵)

図2 財団作成

図3 財団撮影 市野谷入台遺跡 (千葉県教育委員会所蔵)

図4 財団作成

図5 財団撮影

図6 千葉県教育振興財団2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書1』千葉県教育振興財団調査報告第545集第69図より転載

図7 千葉県教育振興財団2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書1』千葉県教育振興財団調査報告第545集第138図より転載

図8 當眞嗣史作成

図9 財団撮影

図10～12 財団撮影

図13 千葉県教育振興財団2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3』千葉県教育振興財団調査報告第606集より加筆編集

図14 財団作成

図15 財団撮影

図16・表1 千葉県教育振興財団2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書1』千葉県教育振興財団調査報告第545集第141図をもとに作成

第Ⅳ部 奈良・平安時代

図1・2 財団作成

図3 『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)第5章第5節(2)』から転載

図4・5 『龍角寺ニュータウン遺跡群 千葉県印旛郡栄町龍角寺ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書』から転載、千葉県立房総のむら所蔵

図6 財団撮影

図7 『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)第5章第5節(2)』図4より加筆編集

第Ⅴ部 中・近世

図1 千葉県教育振興財団2017『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書9』千葉県教育振興財団調査報告第767集を元に財団作成

千葉県教育振興財団2006『房総の近世牧跡』所収図を一部加筆編集

図2 千葉県教育委員会所有資料を一部加筆編集

図3～5 財団撮影

図6 白井市郷土資料館資料を一部加筆編集

参考文献 (発掘調査報告書は割愛)

第Ⅰ部 旧石器時代

福井県年縞博物館 2022『福井県年縞博物館 解説書』

第Ⅱ部 縄文時代

渡辺 新 1997「複構造炉の住居跡・集塊する土坑墓群 - 市川市高谷津遺跡の資料紹介と若干の考察 -」

財団法人印旛郡市文化財センター 2007「Ⅳ 中期」『印旛の原始・古代 - 縄文時代編 -』

大工原 豊 2008「第1節 縄文時代前期の硬質頁岩製石匙・石槍の流通と型式変容」 - 形式の模倣と模造について -」『縄文石器研究序論』

鹿又喜隆 2009「押出遺跡の石器の機能」『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』

秦 昭繁 2010「押出遺跡の「両刃石匙」から見る石器消費形態」『山形考古』第9巻第2号

橋本勝雄 2021「和歌山県御坊市天田橋南出土の押出型石匙（両刃石匙）について」『紀伊半島をめぐる海の道と文化交流予稿集・論考集』

第Ⅲ部 古墳時代

脇山佳奈「重圏文鏡の画期と意義」『広島大学大学院文学研究科 広島大学考古学研究室 紀要』第7号 2015 p.p.13-37

『研究紀要27古墳時代中期の房総 - 中期的要素の波及とその評価 -』財団法人千葉県教育振興財団 2012

合田芳正「炉址小考 - 南関東地方弥生時代の炉を中心に -」『青山考古』第6号 青山考古学会 1988 p.p.2-12

鶴見貞雄「炉石住居覚書 - 茨城県の弥生・古墳時代住居例から -」『研究ノート』第5号 財団法人茨城県教育財団 1995 p.p.103-124

神林幸太郎「古墳時代の東北における炉の様相 - 石・粘土・土器を用いる構造を中心として -」『福島考古』第61号 福島県考古学会 2019 p.p.43-62

『鍋と甕そのデザイン』第4回当会考古学フォーラム 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996

第Ⅳ部 奈良・平安時代

『房総考古学ライブラリー7 歴史時代 (1)』1993 (財)千葉県文化財センター

『千葉県の歴史 資料編 考古3』1998 (財)千葉県史料研究財団

『千葉県の歴史 通史編 古代2』2001 (財)千葉県史料研究財団

『火葬と古代社会 - 死をめぐる文化の受容 -』2006 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

第Ⅴ部 中・近世

『千葉県の歴史 通史編 近世Ⅰ』2007 (財)千葉県史料研究財団

青木更吉 2003『小金牧を歩く』

青木更吉 2001『小金牧 野馬土手は泣いている』

久留島浩 2008「近世下総の牧に関する一考察」『牧の考古学』

吉林昌寿 2008「下総近世牧を掘る」『牧の考古学』

千葉県教育委員会 2006『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』

松戸市立博物館 1994『特別展 馬と牧』

	番号	資料名	遺跡名
第Ⅰ部 旧石器時代	1～19	ナイフ形石器ほか	市野谷向山遺跡
	20～22・31・32	ナイフ形石器ほか	市野谷芋久保遺跡
	23～30	ナイフ形石器ほか	市野谷入台遺跡
	33～75	ナイフ形石器ほか	大久保遺跡
	76～80	ナイフ形石器ほか	市野谷向山遺跡
	81・83～85	ナイフ形石器ほか	市野谷芋久保遺跡
	82・86～92	ナイフ形石器ほか	市野谷入台遺跡
	93～102	焼礫	十太夫第Ⅱ遺跡
	103～110・117	ナイフ形石器ほか	市野谷芋久保遺跡
	111～116	石刃	市野谷立野遺跡
第Ⅱ部 縄文時代	1	土器(井草式)	十太夫第Ⅲ遺跡
	2	土器(井草式)	十太夫第Ⅰ遺跡
	3・4	土器(夏島式)	市野谷二反田遺跡
	5	土器(三戸式)	市野谷向山遺跡
	6・7	土器(田戸下層式)	市野谷二反田遺跡
	8	土器(茅山下層式)	西初石五丁目遺跡
	9	土器(茅山下層式)	市野谷立野遺跡
	10	土器(条痕文)	市野谷立野遺跡
	11～13	土器(関山式)	市野谷立野遺跡
	14～18	土器(黒浜式)	市野谷向山遺跡
	19	土器(黒浜式)	市野谷宮尻遺跡
	20	土器(黒浜式)	市野谷芋久保遺跡
	21	土器(黒浜式)	市野谷宮尻遺跡
	22	土器(浮島式)	市野谷宮尻遺跡
	23	土器(浮島式)	西初石五丁目遺跡
	24	土器(浮島式)	大久保遺跡
	25	土器(浮島式)	市野谷芋久保遺跡
	26	土器(浮島式)	市野谷宮尻遺跡
	27・28	土器(諸磯式)	大久保遺跡
	29	土器(興津式)	大久保遺跡
	30	土器(前期末縄文)	市野谷芋久保遺跡
	31・32	土器(阿玉台Ⅰb式)	市野谷芋久保遺跡
	33	土器(勝坂Ⅰ式)	市野谷向山遺跡
	34	土器(勝坂式)	西初石五丁目遺跡
	35	土器(加曾利EⅡ式)	市野谷宮尻遺跡
	36	土器(加曾利EⅢ式)	市野谷二反田遺跡
	37	土器(加曾利EⅢ式)	市野谷入台遺跡
	38	土器(加曾利EⅢ式)	市野谷向山遺跡
	39	土器(加曾利EⅢ式)	市野谷二反田遺跡
	40・41	土器(加曾利EⅣ式)	市野谷向山遺跡
	42・43	土器(称名寺Ⅰ式)	市野谷入台遺跡
	44	土器(称名寺Ⅰ式)	大久保遺跡
45	土器(称名寺Ⅱ式)	市野谷入台遺跡	
46	土器(称名寺Ⅱ式)	十太夫第Ⅲ遺跡	
47	土器(称名寺Ⅱ式)	市野谷二反田遺跡	
48	土器(綱取式系)	市野谷二反田遺跡	
49	土器(堀之内Ⅰ式)	十太夫第Ⅲ遺跡	
50	土器(堀之内Ⅰ式)	市野谷入台遺跡	
51	土器(堀之内Ⅰ式)	市野谷立野遺跡	
52	土器(堀之内Ⅰ式)	市野谷宮尻遺跡	

	番号	資料名	遺跡名
第Ⅱ部 縄文時代	53	土器(堀之内Ⅱ式)	市野谷芋久保遺跡
	54	土器(加曾利BⅡ式)	市野谷向山遺跡
	55	土器(安行Ⅰ式)	大久保遺跡
	56	土器(安行Ⅱ式)	西初石五丁目遺跡
	57	土器(安行3c式)	市野谷芋久保遺跡
	58	土器(安行3d式)	市野谷立野遺跡
	59・60	土器(前浦式)	市野谷向山遺跡
	61～63	土器(黒浜式)	西初石五丁目遺跡
	64～68	土器(加曾利EⅢ式)	市野谷向山遺跡
	69・70	土器(称名寺Ⅰ式)	大久保遺跡
	71～75	土器(堀之内Ⅰ式)	市野谷立野遺跡
	76・77	土器(姥山Ⅲ式)	市野谷立野遺跡
	78	土器(安行3c式)	市野谷立野遺跡
	79	有舌尖頭器	市野谷向山遺跡
	80～82	石鏃(チャート)	西初石五丁目遺跡
	83	石鏃(チャート)	市野谷中島遺跡
	84～86	石鏃(チャート)	市野谷宮尻遺跡
	87	石鏃(チャート)	市野谷向山遺跡
	88・89	石鏃(チャート)	大久保遺跡
	90・91	石鏃(黒曜石)	市野谷芋久保遺跡
	92・93	石鏃(黒曜石)	市野谷向山遺跡
	94	石鏃(珪質頁岩)	市野谷入台遺跡
	95	石鏃(流紋岩)	市野谷二反田遺跡
	96	石鏃(流紋岩)	市野谷向山遺跡
	97	石錐	市野谷入台遺跡
	98	有撮石器	大久保遺跡
	99・100	打製石斧(分銅形)	市野谷宮尻遺跡
	101	打製石斧(分銅形)	市野谷立野遺跡
	102	打製石斧(分銅形)	市野谷芋久保遺跡
	103	打製石斧(撥形)	市野谷芋久保遺跡
	104	打製石斧(短冊形)	市野谷芋久保遺跡
	105	磨製石斧	市野谷芋久保遺跡
	106	磨製石斧	市野谷向山遺跡
	107	石皿	市野谷向山遺跡
108	磨石類	市野谷向山遺跡	
109	磨石類	市野谷芋久保遺跡	
110	石錘	市野谷立野遺跡	
111	軽石製品	市野谷向山遺跡	
112	石製塊状耳飾	市野谷入台遺跡	
第Ⅲ部 古墳時代	1・2	器台	市野谷宮尻遺跡
	3	炉器台	市野谷宮尻遺跡
	4・5	高杯	市野谷宮尻遺跡
	6	小型丸底埴	市野谷宮尻遺跡
	7	鉢	市野谷宮尻遺跡
	8	壺(広口壺)	市野谷宮尻遺跡
	9	壺(埴)	市野谷宮尻遺跡
	10	壺	市野谷宮尻遺跡
	11	無頸壺	市野谷宮尻遺跡
	12・13	壺	市野谷宮尻遺跡
	14・15	台付甕	市野谷宮尻遺跡

番号	資料名	遺跡名
16	甕	市野谷宮尻遺跡
17・18	甌	市野谷宮尻遺跡
19	台付甕(受け口縁)	西初石五丁目遺跡
20	甕(受け口縁)	西初石五丁目遺跡
21～24	台付甕(S字状口縁)	西初石五丁目遺跡
25・26	甕(布留)	西初石五丁目遺跡
27	甕	市野谷宮尻遺跡
28～30	高杯(東海系)	市野谷宮尻遺跡
31	壺(東海系)	市野谷宮尻遺跡
32	壺(大廓式)	市野谷宮尻遺跡
33	高杯(北陸系)	市野谷宮尻遺跡
34・35	装飾器台(北陸系)	市野谷宮尻遺跡
36	壺(東海系)	市野谷宮尻遺跡
37～39	椀	市野谷入台遺跡
40	鉢	市野谷入台遺跡
41・42	高杯	市野谷入台遺跡
43・44	坩	市野谷入台遺跡
45	壺	市野谷入台遺跡
46～48	甕	市野谷入台遺跡
49・50	台付甕	市野谷入台遺跡
51	甌	市野谷入台遺跡
52～60	手捏土器(鉢)	市野谷宮尻遺跡
61～89	手捏土器(椀)	市野谷宮尻遺跡
90～99	手捏土器(壺)	市野谷宮尻遺跡
100～103・108・110	甕	市野谷宮尻遺跡
104～107	台付甕	市野谷宮尻遺跡
109	壺	市野谷宮尻遺跡
111	甌	市野谷宮尻遺跡
112	銅鏡(重圈文鏡)	西初石五丁目遺跡
113～115	壺	西初石五丁目遺跡
116	椀	西初石五丁目遺跡
117～125	手捏土器	西初石五丁目遺跡
126	皿(舟形土器)	市野谷宮尻遺跡
127	ミニチュア土器(高杯)	市野谷宮尻遺跡
128	ミニチュア土器(器台)	市野谷宮尻遺跡
129	ミニチュア土器(壺)	市野谷宮尻遺跡
130	ミニチュア土器(台付甕)	市野谷宮尻遺跡
131	ミニチュア土器(台付甕)	市野谷入台遺跡
132	土製模造品(鏡)	市野谷宮尻遺跡
133・134	土製勾玉	市野谷宮尻遺跡
135	土製管玉	市野谷宮尻遺跡

第Ⅲ部
古墳時代

番号	資料名	遺跡名
136～144	土製丸玉	市野谷宮尻遺跡
145・146	母岩	市野谷入台遺跡
147・148	剥片	市野谷入台遺跡
149	剣形未成品	市野谷入台遺跡
150・151	有孔円板未成品	市野谷入台遺跡
152	板状剥片	市野谷入台遺跡
153	勾玉未成品	市野谷入台遺跡
154	剣形未成品	市野谷入台遺跡
155	有孔円板未成品	市野谷入台遺跡
156～168	白玉未成品	市野谷入台遺跡
169	紡錘車未成品	市野谷入台遺跡
170～173	勾玉	市野谷入台遺跡
174～176	剣形	市野谷入台遺跡
177	有孔円板	市野谷入台遺跡
178～183	白玉	市野谷入台遺跡
184	棗玉未成品	市野谷入台遺跡
185～188	軽石	市野谷入台遺跡
189～191	砥石	市野谷入台遺跡
192	剥片一括	市野谷入台遺跡
193	無頸壺	市野谷宮尻遺跡
1～3	土師器杯	市野谷中島遺跡
4・5	土師器甕	市野谷中島遺跡
6・7	須恵器杯	市野谷中島遺跡
8	土師器椀	市野谷中島遺跡
9	土師器甕	市野谷中島遺跡
10	支脚	市野谷中島遺跡
11	須恵器杯	大久保遺跡
12	砥石	大久保遺跡
13	須恵器短頸壺	市野谷宮尻遺跡
1	銭貨(寛永通寶)	西初石五丁目遺跡
2	銭貨(紹聖元寶)	西初石五丁目遺跡
3	染付輪禿皿(肥前系)	大久保遺跡
4・5	かわらけ	市野谷向山遺跡
6・7	陶器灯明皿(瀬戸美濃系)	市野谷向山遺跡
8・9	陶器灯明皿	市野谷向山遺跡
10	陶器皿(瀬戸美濃系)	市野谷向山遺跡
11	陶器香炉(瀬戸美濃系)	市野谷向山遺跡
12	陶器灯明皿(瀬戸美濃系)	市野谷向山遺跡
13	陶器鉢(瀬戸美濃系)	市野谷向山遺跡
14～19	染付碗(肥前系)	市野谷向山遺跡
20	瓦質焙烙	市野谷向山遺跡

第Ⅲ部
古墳時代

第Ⅳ部
奈良・平安時代

第Ⅴ部
中・近世

●発行日：令和5年7月13日

●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団 〒284-0003 四街道市鹿渡809-2

●印刷：株式会社工リート情報社

令和5年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金(地域の特色ある埋蔵文化財活用事業)の交付を受けて実施しています。